



将来を見据えて

アーシャ理事 田村 嘉應

今、三浦さんを中心に行っている農村開発の数々の事業は、さかのぼってみると1974年に牧野一穂さんがアラハバード農業大学（当時の名称）に継続教育学部を創立し、由紀子夫人とともに活動を始められ、30年後の2004年、三浦照男さんが牧野さんから引き継いで今日に至っています。

アラハバードがあるウツタル・プラディッシュ州は、インドの中でも貧困地域として、農村住民は貧しくこの結果として教育が行き渡らず、現在でも就学していない子どもたちがかなりいるという状況のようです。三浦さんたちスタッフはこのような環境の中で住民に対する生活の向上、子どもの就学、女性の地位向上、栄養と健康の増進そのほかの活動を続けています。

ここで僕が考えたいのは、これらの活動を主体的に行っているのは三浦さんを初め日本人スタッフです。つまり外国人です。三浦さんたちはSHG(Self Help Group 自助組織)を地元の人に作ってもらい、自立した活動を促がしています。

しかし、地元日本人に変わる指導者が見当たらないため、SHGが本当の意味の自助組織になるのはかなりの時間が必要ではないかと考えます

幸い、アラハバードでは大学内に、「農村青年指導者研修コース」があり農村指導者を養成するための研修を行っています。すでに地元の青年が研修生として在学していますが、これを更に広げ、その目標を「地元NGOの設立と活動の肩代わり」とすることが、僕の提案です。これにより、「インド人によるインド人のための活動」ができます。これにはかなりの時間を要します。地道に将来を見据えてやらなければならないでしょう。でも、これが実現したときは、インド人の本当の意味での「自立」であり、一方、日本人スタッフは地元NGOに対する相談、助言、評価などに役割が変わり、今までより更に広い地域を活動の対象にすることができます。

アラハバードでの活動は、間もなく40年になります。この辺で将来を見据えた発想の転換が必要ではないかと考えまして、問題提起をしました。